

「故郷ナザレでの伝道 2」

2015年05月12日

ルカによる福音書 4章22節～30節。皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」イエスは言われた。「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」

そして、言われた。「はっきりしておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。確かにしておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、エリヤはその中のだれのもとにも遣わされないで、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。また、預言者エリシャの時代に、イスラエルには重い皮膚病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。

主イエスは故郷ナザレの会堂で、イザヤ書からの説教をされた。神の霊を受け、油注がれたメシアが遣わされ、貧しい者に福音を告げ、捕われている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を、圧迫されている人を自由にするという、神の恵みを預言したイザヤの預言は、あなたがたが耳にした今日、実現したと説教された。この説教を聞いたナザレのある人たちは主イエスをほめ、恵み深い言葉に感嘆した。ところが「この人はヨセフの子ではないか」と言う人々もいた。ヨセフ亡き後、貧しい子沢山のマリアの長男イエスは、幼い頃からの成長ぶりや人柄を知られていただろう。肉の目を持って、この男に何ができるかと蔑んだのである。

パウロはコリント(二)5章16節で「わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません」と書いている。ナザレのある人たちは肉に従って知ろうとし、主イエスの言葉を受け入れなかった。カファルナウムで行った諸々の奇跡を聞き、ナザレでも見せてくれと要求するのであろうと見抜き、主イエスは「はっきりしておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」と言われた。確かに幼い頃のことを知っている、真実な言葉であっても耳を貸せないことがある。そこで、主イエスは旧約聖書に記された二つの故事を語った。預言者エリヤは大飢饉が起こった時、自国イスラエルのやもめではなく、異邦のシドン地方のサレプタのやもめに食べ物を事欠かないようにし、息子の命も助けた。また、預言者エリシャは、自国イスラエルには重い皮膚病の人が多くいたが、異邦のシリア人ナアマンの重い皮膚病を清めた。主イエスは二つの故事から、神の恵みはイスラエル人だけでなく、排斥された異教徒にも与えられ、彼らはそれを受け入れると語ったのである。故郷ナザレの人から受け入れられなかったことへの無念さが滲む。主イエスの福音は異教徒を含む全ての人々に与えられているというルカの神学が表された記述であろう。

イスラエル人が捨てられ、異邦人が神の恵みに与っていると聞いて、ナザレの人々は激怒した。町の外へ追い立て、山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。主イエスは、彼らの間を通り抜け、ナザレを立ち去り、危うく命を保たれた。言葉は肉の目ではなく、その真実によって伝わり、受け入れられるのである。